

午後4時40分。語り手の「俺」は、アーバー坂とストウニー坂の道辻でジョウ・ハインズとばったり出会う（会話の内容から、「俺」の職業が〈借金取り〉であるとわかるが、本名は最後まで明らかにされない）。ジョウの提案により「市民」に会うべく、リトル・ブリテン通り沿いの「バーニー・キアナン」<sup>1</sup>の酒場へ向かう。店内に入ると市民はいつもの席で、「ガリーオウエン」という名の犬を連れていた。給料が入ったばかりのジョウのおごりで飲んでいるとアルフ・バーガンがやって来て、既に店で飲んでいたボブ・ドーランが会話に加わる。



アルフとドーランはディグナムが死んだことを知らず、大いに驚く。酒場の前でマーティン・カニンガムを待っていたブルームが入り口で逡巡をしていると、ガリーオウエンが唸り出し、市民は「食いつきやしねえって」とブルームを招き入れる(U-Y 12.513)。

ジョウから酒を勧められるがブルームは丁寧に断り、葉巻を選ぶ。それを見て、「俺は」彼が「謹慎会員」(フリーメイソン会員)であると考え、H・ランボウルドという名の絞首人の手紙をジョウが紹介すると、処刑された男の性器が勃起することに一同は盛り上がるが、ブルームは「それは科学で説明がつかます……自然現象にすぎない」(U-Y 12.516)と言う。絞首刑からの連想で、話題は対英独立戦争に殉じたアイルランドの英雄たち——ウルフ・トーン、ロバート・エメットなど——に移り、興奮した「市民」は「死者の冥福を」「シン・フェイン! ……我ら自身のみ! 我らが愛する友は傍らにあり我らが憎む敵は眼前にあり」と言う(U-Y 12.518)。さらに話題は、ゲール語連盟や組合会議、「ゲールのスポーツの復活、そして本挿話の主題である〈ナショナルリズム〉へと発展し、「過激な運動」であるボクシングの賭けの話題から、ボイランの名前が挙がる。「彼は催しものの名手ですから」と言うブルームの発言を聞いて、「俺」はボイランとモリーの間に何かがあると感じる。これは〈内的独白〉であるため、読者は彼の邪推が当たっていることを知る。

やがてネッド・ランバートとJ・J・オモロイがやって来て、「U・P」と書かれたハガキをめぐってデニス・ブーリンが訴訟を起こそうとしていることが話題になる（ブルームはこの件については夫人から第8挿話で既に耳にしている）。ユダヤ人の金貸し、ルーベン・J・ドッドの話題から、〈市民〉は「わんさかアイルランドに来やがって国中虫けらだらけにしやがる」と吐き捨て、ブルームは「聞こえないようなふり」をするも、〈市民〉の怒りは、英国の植民地支配へと移り、「異人はこれ以上家ん中に入ってくるな」と言う(U-Y 12.541-42)<sup>2</sup>。

ジョン・ワイズ・ノーランとT・レネハンがやって来て、一時は金<sup>ゴールド</sup>杯(モイラナイン)の話題にもなるが、〈市民〉の怒りは治まらない。英国の文明は「文明の痲器(syphilisation)」(U-Y 12.543)であると言い、アイルランドは再び戦いを挑まなければならないと力説する。これに対しブルームは「力に力を対抗させるならアイルランドでもやはり同じになりませんか?」と言い、世界の歴史には「迫害」が満ちていると反論する。「国民」とは何かを尋ねられたときも、ブルームは「国民とは同じ場所に住んでいる人々のことです」と言い、周囲の

<sup>1</sup> John Hunt, "Barney Kiernan's," *Joyce Project*. <https://www.joyceproject.com/notes/120004kiernans.htm>.

<sup>2</sup> ユダヤ人が国を滅ぼしていると第一挿話で嘆いていたハインズ、不義の女がアイルランドにサクソン人を招き入れたとした顔で述べていた第二挿話のディージーがここで想起される。

男たちから嘲笑われても、自分の国家は「アイルランドです。……僕はここで生まれましたからね。アイルランドです」(U-Y 12.550-53)と主張する。作品中で初めて、ブルームは自らがユダヤ人(ユダヤ系)であることを隠さず語り——「それに僕だってある民族に属しているんです……忌み嫌われて迫害されている民族の。いまだにです。この今も。この瞬間にも。この刹那にも」——、「力、憎しみ、歴史、そういうものはすべて……男にとっても女にとっても……人生じゃないんです」、そして「憎しみの反対」の「愛」こそが「人生(life)」なのだとする(U-Y 12.554-55)。場の雰囲気好戦的になったことを察知したブルームは、カニンガムを探しに裁判所を見てくると言い訳をして中座すると、酒場の男たちは彼の「普遍の愛」や隣人愛を揶揄し、レネハンがブルームが競馬で大穴を当てたため、換金しに行ったのだと〈誤解〉したまま一同に語る。

マーティン・カニンガムとジャック・パワーとJ・T・A・クロフトンがやって来て、ブルームがシン・フェイン党と深く関わっていること、(第10挿話で言及された)歯医者ブルームの従兄弟であること(これらは〈誤解〉)、そしてハンガリー出身の「背信ユダヤ人」で、毒をあおって自殺した父親がヴィラグからブルームに改名したこと(いずれも〈花〉の意)などを語る。これらの(一部真実を含む)噂話が高まる中、戻って来てカニンガムたちと店を出ようとするブルームに対し、〈市民〉の怒りは治まらない。「イスラエルに万歳三唱！」と彼が叫ぶと、ブルームも負けじと「メンデルスゾーンはユダヤ人だったぞカール・マルクスもメルカダ Danteもスピノザもだ。それに救世主はユダヤ人だったしその父親もユダヤ人だったんだ。あんたらの神だぞ」と叫ぶ。〈市民〉は「イエスにかけて……あのユダ公の脳天を打ち割ってやる……イエスにかけて、俺はあいつを磔にしてやる(By Jesus, I'll crucify him so I will)」(U-Y 12.568-69)と叫び、ジェイコブのビスケット罐を投げつけるが、間一髪ブルーム一行は馬車に乗り込んで走り出していた。

無名の「俺」の語りと33箇所挿入的な語りから成る本挿話を締めくくるのは、聖書を模した散文であり、ブルームは預言者に擬えられる——「そして皆の見守りし中、**かのお方**まさしく**かのお方**、息ブルーム・エリヤ、天使らの<sup>たなぐも</sup>に包まれて光輝の光背へとリトルグリーン通りドノハウ亭上方四十五度の角度にて昇り行く、あたかも<sup>ひょうろくたま</sup>表六弾のごとく」(U-Y 12.572)。



リトル・ブリテン・ストリートにあるバーニー・キアナン跡地(写真:2019年、ジョン・ハント氏) Joyce Project より

Google Map のストリート・ビューは下記から

<https://www.google.com/maps/@53.3492381,->

[6.270169,3a,62y,335.75h,91.09t/data=!3m6!1e1!3m4!1sF1T6ho1Dy6icSS4cN1znmw!2e0!7i16384!8i8192](https://www.google.com/maps/@53.3492381,-6.270169,3a,62y,335.75h,91.09t/data=!3m6!1e1!3m4!1sF1T6ho1Dy6icSS4cN1znmw!2e0!7i16384!8i8192)